二松学舎松苓会 岩手県支部便り
発行日 二〇二三年 四月二四日
編集者 宮本 義孝 第一七号

或る読書の思い出

一

私らが小・中学生だった頃、使っていた国語の教科書は、山本有三の編集で、面白い話や考えさせられる話、心に響く話などがたくさん載っていた。

授業は好きではなかったが、一人で教科書を読むのは楽しかった。

後になって、これらの話の多くは、山本有三が中心になって子ども向けに編集した『日本少国民文庫』の中にあることが分かった。

私の手元には戦後、新潮社から復刊された新編、全十二巻が並んでいて、暇があれば拾い読みなどをし、往時のことを懐かしんでいる。

ところがこの中に出処がどうしても分からない作品が一つあった。吉野源三郎の「星空は何を教えたか」である。

吉野源三郎には『君たちはどう生きるか』と云う、文庫中、『心に太陽を持て』と並んで特に有名な作品があるけれど、そこにも見当らない。それがいつも喉に刺さった棘のように気になっていた。

ところが或時、ひょんなことからそれが分かったのである。

大学を卒業して高校の教師になった時、そこに私にとって大先達ともいうべき先生がおられた。

その先生とあれこれ話をしていた折、たまたま吉野源三郎の話が出、「星空は」の出典のことを告げると、

「ああ、それなら知っていますよ」とおっしゃって、書斎から一冊の本を取り出してきた。

書名は『ぼくも人間 君も人間』だった。それは牧書店と云う出版社から出ていた。

最速、牧書店に問い合わせた。が、残念なことに、今は絶版だという返事だった。

どうしてもこの本を手元に置いておきたい、という思いで、先生からこの本を借り受け、その年の夏休み、ノートに書き写した。

ところが偶然が扉を一つ押し開くと、次々と心に掛かる問題が明るみに出てくる。

夕食をすませた後、当時、住んでいた西荻窪の商店街をぶらついていたら、さほど大きくない古本屋があって、店いっぱいに本が積み上げられ、まるで倉庫のようだった。

特に欲しい本はなかったが、どんな本があるのか興味がそそられ、置いてある本を引っ繰り返していると、専門書の底にふさぎ本が隠れていた。

それは、絶版になっているという『ぼくも人間 君も人間』だった。あった、と言うより飛び込んできたといった感じだった。新品同然で、その時、幾らで買ったか忘れたが七、八十円だったような気がする。

実に、「求めよ、さらば與へられん」であった。

こんな偶然から十年来、求めていた本を私は手に入れたのである。

二

あらすじで感動は得られないが、内容をまったく知らなければ先に進められないので、紹介する。

話は、ボクで登場する、吉野源三郎が十四歳だった時の、正月のことである。

ボクは弟のアキラと二人きりで留守番をしていた。もう、とっくに夕飯の時刻は過ぎているのに、用事で出掛けたお母さんとお姉さんは帰ってこない。外出したお父さんもそのままだ。空腹も手伝って何となくボクは面白くない。が、アキラは一向そんなふうでもなく炬燵にあたって熱心に雑誌を読んでいる。その様子も、何かボクには気に入らない。

そんな時のことである。

所在ないまま、ボクは立っていって何気なくラジオのスイッチを入れた。すると落語だか浪花節だか、いきなり大人の下卑た笑声が飛び出てきた。

それで、ボクが音量のつまみをいじくっていると、

「兄さん、やめてよ。本が読めやしない」

と弟が文句を言った。

すると、人間には自分が不愉快な時、無性に人に意地悪をしたくなる時があるものだ。特に聞きたいわけでもなかったのに、ボクはそのままにして炬燵に戻ってきた。

弟はムッとしたらしい。立ち上がると行ってパチリとスイッチを切った。

「何をするんだ。おれが聞いているじゃないか」

ボクはまたスイッチを入れる。

「こんなの、子どもが聞くもんじゃない」と弟。
「余計なお世話だ」
そうやって喧嘩になった。
もう一度、スイッチを切ろうとする弟を突き飛ばしたのが始まりで、もう我慢ができないという様子で跳ね起きた弟は、目にいっぱい涙をためて猛犬のように組みついてきた。
弟とは歳が二つしか違わなかったから、本気になって跳びかかってくると、ボクもたじたじになる。組み合ったまま、ドタン、バタンと転げ回るような喧嘩になった。その時、
「さあ、もうおやめ」と声がした。
いつの間に帰って来たか、側にお父さんが立っていた。
お父さんの姿を見て弟は、ワッと泣きながらお父さんにかじりついた。
こんな時、我々だったら、「兄弟喧嘩はいけない」とか「いい加減にしなさい」とか、叱ったり注意したりするだろうが、お父さんは何も言わない。弟の肩を抱いたままラジオのスイッチを切り、お母さんたちが帰ってきていないのを確かめると台所からパンと紅茶を運んできた。
そうこうしている内、お母さんたちも帰ってきた。
電車の故障で遅れたのだという。着替えもしないままエプロンをつけ、夕食に取りかかった。
さて、夕食がすんだ後のこと、
「長谷部さんの所に本を取りに行くが一緒に来ないか」
と、お父さんはボクを連れだした。
そして、用事をすませた帰り道、ボクとお父さんは坂の上に出る。
もうすっかり夜で空気は冷えて頬に痛いくらい。往来もカンカンに凍っていたそうだ。
その坂の上からは空が一層広く大きく眺められ、見下ろすと、広がる闇の中に燈火が点々と灯り、それは星に劣らず美しく見える。
そして、その帰り道、お父さんはポツリポツリと星のことを話しだしたのだ。
光が一年かかって走る長さを一光年とし、星の距離はそれを単位に表すこと。そして太陽系や銀河系の話。それから頭上のたくさんの星の中に際立って光の強い星をさがし出し、
「あのシリウスは、ここまで、ざっと八年半かかって光が到達する。それでもシリウスは地球に近い恒星で、近い順からいうと確か六番目だ」そんなことも話す。
もちろん宇宙の広がりは七、八年ほどのものではない。何

千年、何百年、何億光年という星も今では観測されている。
ボクは、そんな話を聞いている内、宇宙の、人間一人ひとりの一生をはるかに超えた大きな時間と広がりの中で、弟とあんなささいなことで取っ組み合いの喧嘩をしたんだ、という思いになる。泣きはらした弟の、しょんぼり炬燵にあたっている姿も目に浮かんでくる。
弟のアキラは、それから三ヵ月ほどたって急性肺炎にかかり、わずか一週間ほどで亡くなった。そういうこともあって、あの時、お父さんと一緒に見た夜空に輝く星々と、自分が弟にしたいじわるな行為は、悲しみを伴って、生涯、忘れられない思い出となる。

三

「星空は何を教えたか」のどこに感動したのか、まだ幼かった私にはよく分からなかった。けれど、分かりたいという気持はあって、以後、何度もこの話を思い返した。そして今は多分、次のようなことだったんだろうなぁ、と考えている。
なぜ、あの時お父さんは叱らなかったか。
それは、大人たちは帰ってこない。お腹をすかせてイライラし、不安になっている、そんなボクの気持を分かっていたからだと思う。
お父さんの言動には、人に対する思い遣りがある。
私も、お父さんのような思慮深い人になりたいと思った。
もう一つは、叱り方、注意の仕方について。
子どもや生徒が何か悪いことを仕でかした時、我々は叱る。それは、別に間違いではない。
けれどそれだと、叱られるから、注意されるから、しない、というふうにもなる。
一番なのは、自分が自分で悪かったと気づかせることだ。その為に、大人は子どもや生徒に心を添わせ、その手助けをしてやることだろう。
ところが今の大人はもっと悪くて、「馬鹿野郎」だとか、「駄目な奴」、「幼児以下」などと言って否定する。これだと、悪い、と分かっていても反撥したくなる。それで体罰になる。最近、そういう事例が多くなってきた。
それからもう一つ。それは自分が面白くない時、人にその不快さをぶつけないことだ。「怒りをうつさずへ不遷怒〉」という言葉もある。今の世の中を観ると、元々は、どうでもいいようなささいなことを、お互い言い張り合って却って事をややこしくしている例が多いような気がする。
そして最後に、過ちの問題がある。

人は自分が思うほど賢くはないし、拠って立つ所もしっかりしているわけではない。それでよく人を傷つけたりする。

そんな時、多くは、自分の過ちをなかなか受け入れられず、言い訳したり、隠したり、忘れようとしたりする。けれど主人公のボクは、弟を失った衝撃もあって、自分のいじわるを長く忘れられなかった。

このことは、いつまでも悔恨の情から抜け出せないようにみえるけれど、実際はむしろ、自分の弱さをそっと包んで、悲しみは悲しみのままに、懐かしい思い出に変っていったのではないかと思うのだ。

心に残るしみじみとした思い出は、時には妬み、高ぶる心を静め、時には落ち込んだ心を慰め励ます力になるのではなかろうか。

心に残る懐かしさは、楽しさからだけでない。悲しみや苦しみからも生まれるものだと思う。

四

私が西荻窪の古本屋で『ぼくも人間　君も人間』に出会って間もなくポプラ社から『ジュニア版吉野源三郎全集』全三冊が出た。牧書店の方は絶版のままだが、「星空は」は、ポプラ社版の第二巻『人間の尊さを守ろう』に収められているので、それで読むことができる。

それで、「星空は」の話は、一応終りになるのだが、『人間の尊さを守ろう』については、もう少し話したいことがある。

全集第一巻『君たちはどう生きるか』は、コペル君と渾名されたこの一人の少年の心の成長を描いて、人間の生き方を考えようとしたもの。第三巻『エイブ・リンカーン』は、人民による人民の為の政治を世に確立しようとして闘ったアメリカ合衆国第十六代大統領の話だが、この第二巻『人間の尊さを守ろう』は、さして長くない様々な文章が、配列を変え、編集をしなおしたりして読みやすいよう工夫はしてあるが、混じって載っている。

そしてその中に、これはこの巻の表題にもなっている「人間の尊さを守ろう」と、もう一つ、「ヒューマニズムについて」と云う文章があって、この二つが特に私の心に残った。

まず、「人間の尊さ」についてだが、これは社会にかかわって生きる人間の在り方について述べたものだ。

人間は様々なことに興味や関心を持っていて、それを趣味にしたり職業にしたりして生きている。「好きこそ物の」だから良く学び、没頭したりもする。

だが一方、人間は自分だけで生きているわけではない。常

に社会の内に在って生活している。だから、個人としての自分を考える前に、或はそれと同時に、社会とのかかわり方も考えなければいけない。

つまり、「誰もが力いっぱい、伸び伸びと生きてゆける世の中、誰もが生まれてきて良かったと思えるような世の中、自分を大切にすることが同時に人を大切にすることになる世の中」、そういう世の中を築くため、かかわって生きていかなければいけないということだ。

そんな生き方、考え方を、個人主義とか自由主義の話、民主主義の政治、それに現代の戦争や原子力と平和など、今、在る問題を取り上げ、中学生にも理解できる平易な文章で提起している。

もう一つの「ヒューマニズムについて」は、自身の体験をとおし、悩み考えた吉野源三郎の思索の軌跡ともいうべき文章である。

これは、彼自身、どうしても書いておきたかった文章のようで、「あとがき」には、

「小、中学の諸君にはむずかしすぎるものです。しかし、この本に書いてあることと深いつながりをもっているものなので、読者がまた何年かして読んでくれたらと考えて、ここに付け加えておいたわけです」とある。

この文章を読んで、私は吉野源三郎の心の軌跡をなぞって、彼の考えを受けとめてみたいと考えるようになった。

それで、彼が見聞したであろう事柄を中心に、例えば、南京事件で代表される日本人の中国大陸における残虐行為やナチスのユダヤ人虐殺、広島や長崎の原爆投下、沖縄のこと、憲法九条や安保のこと、ヴェトナム戦争など、それに、リンカーンについて書かれたもの、ガンディのサティヤグラハ運動、ドストエフスキーの作品など、関連図書を集めて読むようになった。

「ヒューマニズムについて」は、ポプラ社版の他、今から十年ほど前の二〇一一年五月に岩波書店から現代文庫の一冊として出版された『人間を信じる』にも入っている。

こちらだと、八、一五を原点とした戦後民主主義や平和への思いなど、それにジャーナリスト、編集者としての回想なども入っていて、吉野源三郎の思想全体をかなり知ることができる。

私のように複雑な事柄を読み解く力のない者にとって、吉野源三郎の論考はありがたい。

多くの人が手に取って一読されんことを願う。